

劇シキトキハモルヒ子ノ皮下注射ヲ行ヘント

九日廿四日 重炭酸曹達一棧 亜括八号 毎時一匙 牛乳、肉羹汁ヲ与フ

廿五日 繃帯及縫合糸帽針ヲ除去シ絆創膏条ヲ数箇貼ス
廿六日 絆創膏条ヲ除キ更ニ其ノ中央ニ二箇ノ絆創膏ヲ貼シ且カルボルシユール二ペルセントノ者ヲ撒糸ニ蒸シ交換スルコト毎十五分時間ナルベシ

廿九日 赤幾那皮煎八号 毎時一匙

ヘ子チアテレピン油一棧 ヲレーフ油七棧 撒糸ニ蒸シ創傷部ニ貼スルコト一日三回但カルボル酸止

十月九日 硝酸銀ヲ以テ創縁ヲ焼灼スルコト一日一回但シ新生皮膚組織ヲ触ザル様ニ能注意スベシ

十月〇日 加密列浸ヲ撒糸ニ浸シ患部ニ貼ス但シヘ子チアテレピンヲ止ム

十月十八日 沃陳丁幾 朝夕一回創縁ニ塗布 但硝酸銀ヲ止

この症例からみて、ホルトルマンは十九世紀後半のヨーロッパにおける外科診療の趨勢の一端をかなり伝えたものといえよう。

(金沢医科大学)

陸海軍に於ける初期の脚氣病対策

佐久間 温 巳

我が国で始めて、国の軍隊といえるものが成立したのは、陸軍では、明治二年秋、大阪で結成された生徒隊、東京では、明治四年二月二十二日、薩、長、土三藩土で結成された御親兵である。他方、海軍の成立は、慶応四年四月二十八日、幕艦四隻を国有にし、海軍総督大原重徳の指揮下においた時が最初であると考えられる。

記録によると、これらの軍隊で、著しく脚氣が発生したのは、大阪では、明治三年の夏、東京では、明治五年の夏であった。軍隊脚氣に関する当時の対策、治療法については、十分な資料がなく、詳細は不明であるが、ポードイン、アツキンなどの著書が訳されているので、これらに準じて行われたものと考えられる。また、少し後になれば、アンダーソン、メーエルの著書の邦訳、石黒忠恵の著書、脚氣病院報告などの他、石黒忠恵、高木兼寛の回想録、講

演抄録などがあった、これらの資料より、初期の軍隊における脚気対策が推察しうる。

軍隊の脚気対策で一時代を画したのは、陸海軍ともに明治十七年の兵食改良であろう。即ち、陸軍は大阪鎮台軍医長堀内利国の麦飯給与、海軍では高木兼寛を中心とする洋食の採用であった。

以上のことに関し、入手しえた資料より判明したことを述べるとともに、大阪にて堀内軍医長に麦飯給与を示唆したという重地正己軍医についての調査などを報告する。

陸軍では、このあと永年にわたって脚気の研究、論争が続けられるのであるが、今回は明治十七年の兵食改良までの脚気対策について知りえたことを報告する。

(西尾市民病院)

土肥慶蔵と呉秀三

長門谷 洋 治

土肥慶蔵（鶴軒、一八六六一—一九三二）と、呉秀三（芳溪、一八六五—一九三二）はともに名ある医家に生まれ、東大教授となつて前者は皮膚科学を、後者は精神医学を専攻し、わが国における斯学の基礎を築いた。両者は東大での同級生（明治二三年卒、名簿上二四年とすることもある）で在学中より親交があり（明治二三年に土肥は『外科汎論』をあらわすが、これには呉秀三の他、同級の高橋金一郎、井上通泰が協力している）、その友情は終生変ることがなかった。両者には幾つかの共通点がみられる。

①わが国で講座制の確立されつつあるときに卒業、すでに皮膚科学・精神医学の初代教授として先輩の村田謙太郎・榊俣が就いていたが、業半ば若年にして死亡、なかつぎ的な役を他科教授（宇野朗 外科・片山国嘉 法医学）がしたあとを彼らが西欧留学により先端・正統の斯学を学んで